

「主の祈り」

ルカの福音書 11:1~4

はじめに

少し振り返りますが、前々回のルカ 10:25 からの出来事において、イエシュアはユダヤ人の律法学者に対し、神を愛すること、そして隣人を愛することの重要性を教えられました。ちなみにここでの隣人とはイエシュアご自身を指し示しており、つまり神としての、また人としてのイエシュアを愛することが示されていたのです。並行記事のマタイ 22:37~40 ではこれを律法における「第一」の戒めとしています。そしてこの愛することとは、これを意味するヘブル語のアーハヴ(אהב)のその最初の言及から、神を「愛する」とは「神が見つめて、目指しておられるものと同じように見、神すなわちイエシュアと同じ視点、同じ見方でそれを捉え、解釈し、これを「第一」のこととして待ち望み、求めることであると述べました。そしてその神の眼差しは、かつてモリヤの山と呼ばれたエルサレムに向けられており、やがてそこに神ご自身が建てられる神の家、千年王国、またはメシア王国とも呼ばれる「神の国」とそこに集められるイスラエルの民とを見つめておられることであると述べました。これこそが神の教え、神のご計画の「第一」のものであり、それは地上再臨のイエシュアお一人によって成し遂げられます。

これに続く前回のルカ 10:38 からのマルタとマリアの家での出来事については「必要な一つ」のこととしてマリアの行為すなわち「イエシュアの足もとに座った」という彼女の事実から、それは復活したに上られたイエシュアのその足もと、主のみもとに、やがて同じく復活して引き上げられ、集められる携拳という私たち教会に対する神のご計画の「型」であると解き明かし、この事実、この奥義を指してイエシュアは「必要なことは一つだけです」と言われたのだと説きました。このように、イスラエルに対する神のご計画の「第一」のものと、私たち教会に対するただ一つ「第一」のものがつながって示されていたのです。

そしてさらに、これらに引き続く今日の箇所は、広く一般的にも「主の祈り」と呼ばれるイエシュアが弟子たちに教えられた、一つの祈りについての箇所となっています。この祈りもまたイエシュアが教えられたただ一つの、私たちが祈る、求めるべき第一のものと言えるでしょう。今日はそんな「主の祈り」について改めて学んでまいります。

1. ヨハネの祈り

ルカの福音書【新改訳 2017】

11:1 さて、イエスはある場所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに言った。「主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。」

まずイエシュアがこの祈りを教えるに至った経緯が記されています。それは弟子の一人が「ヨハネが弟子たちに教えたように」祈りを教えてほしいと言ったことが発端でした。洗礼者ヨハネ、バプテスマのヨハネはすでに自分の弟子にこの祈りを教えていたのです。その内容は、これからイエシュアが弟子

たちに教えるものと全く同じものであったでしょう。なぜなら、このヨハネも、そしてイエシュアも、ともに「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」（マタイ 3:2、4:17）という全く同じ宣言を第一声としてその宣教の働きを開始しているからです。ですからヨハネの祈りに対抗してイエシュアが全く別の祈りを教えたとは考えられません。何よりヨハネが今から説かれるこの祈りと無関係であるならば、ここに彼の名が記されることはなかったでしょう。ですからこの祈りは主の祈りである前に、バプテスマのヨハネの祈りでもあるのです。このヨハネ(יִחְזְקִיָּהּ)という名は「恵む、あわれむ」という意味のハーナン(יְחִנָּן)を由来とするものです。その最初の言及は創世記 33:5 にあり、アブラハム、イサクの子ヤコブすなわちイスラエルが、自分の女奴隷とその子たち、そして妻とその子たちを指して「神が恵んでくださった子どもたち」と言った事実にあります。つまりヨハネという名には、「イスラエルにつながる、神に選ばれた者たち」の存在が表されており、そのような者たちの祈りがこのヨハネの祈りであり、これからイエシュアが弟子たちに教えられる「主の祈り」と呼ばれる祈りなのです。ですからこの祈りはイスラエルと教会が共有すべき共通の一つとなる祈りなのです。この事実を踏まえつつ、祈りの内容に入ってまいりましょう。

2. 父の御名

ルカの福音書【新改訳 2017】

11:2 そこでイエスは彼らに言われた。「祈るときには、こう言いなさい。『父よ、御名が聖なるものとされますように。御国が来ますように。』

まずこの祈りは「父よ」とあるように、御子イエシュアの父、父なる神、御父に対して祈る祈りであるということ覚えなければなりません。この御方は「神」とも「主」とも呼ばれますが、この祈りにおいては「父」としての御方に向かって祈らなければなりません。なぜならこれ以外の人称、対象としての名称がこの祈りには存在しないからです。ですから厳密に言ってこの祈りは神への祈り、主への祈りではなく「父」への祈りです。並行記事のマタイ 6:9 では「天にいます私たちの父」としてありますが、このルカの福音書においては「父」とその「御名」だけに注目するように記されています。その意味をヘブル語のアーヴ(אָב)の最初の言及で解釈するならば、実はこの祈りの目的は父のみもとに行くことではなく、父から分かれる、離れることにあるのです。

創世記【新改訳 2017】

2:24 それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。

このように「男は父と母を離れ」たという記述に聖書で最初のアーヴがあります。ちなみに「母」と訳されているエーム(אִמָּה)にも「出発点、分岐、分かれ目」という意味があります。この「父」から分かれ、離れた「男」とはキリストとも呼ばれる御子イエシュアを指していると記されています（エペソ 5:32）。ですから「父よ、御名が聖なるものとされますように」とは、「父」から分かれ出た「御名」が「聖なるものとされますように」という祈りであり、この「御名」とはもちろん御子イエシュアのことです。事実、イエシュアご自身も「わたしは、わたしの父の名によって来た（ヨハネ 5:43）」と言って

おられます。しかし誤解しないでいただきたいことは、この父と子は分かたれる、関係が断絶するものではありません。人となられた御子、すなわち人の子は父のその「御名」を受けて、与えられて来られるということです。私たち人がそれぞれ持っている「名前」というものもその人個人を特定し、他と区別、判別するためのものですが、これを意味するヘブル語のシェーム(שֵׁם)のその本来の意味は「第一のもの名(創世記 2:11)」という意味で、さらにその存在の唯一性、優位性が強調されたものなのです。ですから「父」の「御名」とはまさに神のひとり子であり、「すべての名にまさる名(ピリピ 2:9)」を与えられた御子イエシュアを指し示すものなのです。

ピリピ人への手紙【新改訳 2017】

- 2:6 キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、
2:7 ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、
2:8 自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。
2:9 それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。

このように、父からイエシュアに与えられる「すべての名にまさる名」である「御名」は、イエシュアの十字架の死と復活によって、この御業の後に与えられました。つまりヨハネやイエシュアがそれぞれの弟子たちに祈りを教えた時点ではこれはまだ果たされていなかったのです。ですからまず初めにこれを祈る必要性があったのです。このように「父よ、御名が聖なるものとされますように」とは、父から遣わされ、十字架の死と復活の御業を経たイエシュアが「聖なるものとされますように」という祈りなのです。

3. 御国が来ますように

ではそのイエシュアが「聖なるものとされますように」とはどういう意味でしょうか。これを意味するカーダシュ(קָדָשׁ)の最初の言及を見てみましょう。

創世記【新改訳 2017】

- 2:1 こうして天と地とその万象が完成した。
2:2 神は第七日に、なさっていたわざを完成し、第七日に、なさっていたすべてのわざをやめられた。
2:3 神は第七日を祝福し、この日を聖なるものとされた。その日に神が、なさっていたすべての創造のわざをやめられたからである。

このように「神が、なさっていたすべての創造のわざをやめられた」というそのご計画の「完成」を意味する言葉がこのカーダシュの本来の意味なのです。つまり「父よ、御名が聖なるものとされますように」とは、父から遣わされ、十字架の死と復活の御業を経たイエシュアが「神のすべてのご計画を成し遂げ、これを完成させる」という意味を持った祈りなのです。そしてその「完成」とはもちろん「神の国」をこの地に建てることです。ですからこの祈りはこう続くのです「御国が来ますように」と。

そしてこの「御国」を意味するマルフォト(מַלְכוּת)とは王(מֶלֶךְ)が治める国、王国を意味する言葉です。そしてその本来の意味である最初の言及は、以下の預言にあるように、明確にイスラエルただ一つの民のみを指し示す言葉です。

民数記【新改訳 2017】

- 24:4 神の御告げを聞く者、全能者の幻を見る者、ひれ伏し、目の開かれた者の告げたことば。
24:5 なんとすばらしいことよ。ヤコブよ、あなたの天幕は、イスラエルよ、あなたの住まいは。
24:6 それは、広がる谷のよう、また川のほとりの園のようだ。【主】が植えたアロエのよう、また水辺の杉の木のようにだ。
24:7 その手桶からは水があふれ、種は豊かな水に潤う。王はアガグよりも高くなり、王国は高く上げられる。
24:8 彼をエジプトから導き出された神は、彼にとっては野牛の角のようだ。彼は自分の敵の国々を食い尽くし、彼らの骨をかみ砕き、矢をもって撃ち砕く。
24:9 雄獅子のように、また雌獅子のように、彼は身を伏せ、横たわる。だれがこれを起こせるだろう。あなたを祝福する者は祝福され、あなたをのろう者はのろわれる。」

このように「御国が来ますように」という祈りは明確にイスラエルを指し示しており、かつて神が彼らの父祖アブラハムそしてイサク、ヤコブに約束された「あなたを祝福する者は祝福され、あなたをのろう者はのろわれる」という約束の成就と見事に合致するのです。(創世記 12:3) そしてこれをすべてにまさる御名を与えられた御子イエシュアがやがて天からこの地上に再び来られて、実現、完成されるのです。そのような意味を持った祈りが「父よ、御名が聖なるものとされますように。御国が来ますように。」という祈りなのです。

3. 日ごとの糧

ルカの福音書【新改訳 2017】

11:3 私たちの日ごとの糧を、毎日お与えください。

「日ごとの糧」とは決して美味しいごちそうのことではありません。これを意味するレヘム(לֶחֶם)の最初の言及を見てください。

創世記【新改訳 2017】

- 3:17 また、人に言われた。「あなたが妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、大地は、あなたのゆえにのろわれる。あなたは一生の間、苦しんでそこから食を得ることになる。
3:18 大地は、あなたに対して茨とあざみを生えさせ、あなたは野の草を食べる。
3:19 あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついにはその大地に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたは土のちりだから、土のちりに帰るのだ。」

このように「日ごとの糧」とはアダムとエバが犯した罪の結果、その子孫である全地、全人類、全被造物に及んでいる罪ののろいであり「一生の間、苦しんでそこから食を得る」「顔に汗を流して」得るものという、苦しみ、患難を指し示す意味があるのです。ではなぜこのようなものを祈り求めなければならぬのでしょうか。それはこう記されているとおりです。

ピリピ人への手紙【新改訳 2017】

1:29 あなたがたがキリストのために受けた恵みは、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことでもあるのです。

私も幼い頃から教会に通っていましたので学校のクラスメートからそのことで馬鹿にされたことが何度かあります。社会に出てからは毎週の礼拝に集うことの難しさを経験しました。皆さんの中にはいまだにそのような困難の中にいる方々もいることでしょう。しかしこの御言葉が示すとおり、教会の歴史、教会の歩みは困難と迫害の歴史です。これまでどれほど多くの人々が、キリスト、イエシュアを信じるゆえに迫害され、そして殺されてきたことでしょうか。その事実がこの「私たちの日ごとの糧を、毎日お与えください」という祈りには表されているのです。そして今の私たちのこの肉体は日々衰え、やがて「土のちりに帰る」こととなります。このように、この部分だけを見れば、なんとというひどい祈りかと思ってしまうかもしれませんが、「神の国」はこの苦しみ、そして死の向こうにあるものなのです。

Ⅱ コリント人への手紙【新改訳 2017】

4:12 こうして、死は私たちのうちに働き、いのちはあなたがたのうちに働いているのです。

4:14 主イエスをよみがえらせた方が、私たちをもイエスとともによみがえらせ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださることを知っているからです。

4:16 ですから、私たちは落胆しません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。

4:17 私たちの一時の軽い苦難は、それとは比べものにならないほど重い永遠の栄光を、私たちにもたらすのです。

4:18 私たちは見えるものではなく、見えないものに目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからです。

もし私たちが今、何の苦しみも悲しみ、痛みもなく快適な毎日を送っていたとしたら、誰が「神の国」を、誰がイエシュアが来られることを求めるでしょうか。神は今の「一時の軽い苦難」を通して、「それとは比べものにならないほど重い永遠の栄光」としての「神の国」に目を向けさせ、これを求める者となるようにと導いておられるのです。このように神がおられるのになぜ苦しいのか、ではなく、神がおられ、導いておられるからこそ今が苦しいのです。どうぞ、「見えるものではなく、見えないものに」すなわち今はまだ見ることはできませんが、やがて必ず見ることが出来る「永遠に続く」イエシュアと

「神の国」に目を留めてください。それが「**私たちの日ごとの糧を、毎日お与えください**」と祈ることの意味です。

4. 罪と負い目

ルカの福音書【新改訳 2017】

11:4 私たちの罪をお赦しください。私たちも私たちに負い目のある者をみな赦します。私たちを試みにあわせないでください。』

「**罪**」ハッタート(תּוֹטָא)と「**負い目**」フーヴ(חַוִּי)これらの言葉は同じ意味のように思われがちですがそれぞれに異なる意味があります。ハッタートは本来、神に対する罪、神の目に正しくないために受け入れられないことを指します(創世記 4:7)。一方フーヴは以下の一箇所のみに使われるものです。

ダニエル【新改訳 2017】

1:8 ダニエルは、王が食べるごちそうや王が飲むぶどう酒で身を汚すまいと心に定めた。そして、身を汚さないようにさせてくれ、と宦官の長に願うことにした。

1:9 神は、ダニエルが宦官の長の前に恵みとあわれみを受けられるようにされた。

1:10 宦官の長はダニエルに言った。「私は、あなたがたの食べ物と飲み物を定めた王を恐れている。あなたがたの顔色が同年輩の少年たちよりもすぐれないのを、王がご覧になるのはよいことだろうか。あなたがたのせいで、私は王に首を差し出さなければならなくなる。」

これはバビロンの捕囚となったユダヤ人ダニエルとその世話役を命じられたバビロンの宦官の長との出来事です。ここで宦官の長が「あなたがたのせいで、私は王に首を差し出さなければならなくなる」とダニエルに対して言っている中にフーヴがあり、この言葉には、ダニエルすなわち「ユダヤ人のせいで有罪となる危機にさらされる異邦人」の姿が表されているのです。つまり「**私たちに負い目のある者**」とは、私たち教会に「**負い目のある**」ユダヤ人、イスラエルを表しているのです。この状況、関係についてパウロがこのように記しています。

ローマ人への手紙【新改訳 2017】

1:13 兄弟たち、知らずにいてほしくはありません。私はほかの異邦人たちの間で得たように、あなたがたの間でもいくらかの実を得ようと、何度もあなたがたのところに行く計画を立てましたが、今に至るまで妨げられてきました。

1:14 私は、ギリシア人にも未開の人にも、知識のある人にも知識のない人にも、**負い目のある者**です。

1:15 ですから私としては、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を伝えたいのです。

私たちが信じている神はイスラエルの神であり、その福音の宣教は本来ユダヤ人に委ねられ、福音はイスラエルの、エルサレムから始まったのです。ですからユダヤ人であるパウロは異邦人に対してこのような言い方をしており、自分を指して「**負い目のある者**」と言っているのです。そのようなユダヤ人を、

イスラエルを受け入れること、それが「**私たちも私たちに負い目のある者をみな赦します**」という祈りの意味であり、イスラエルの神の御前に受け入れられる、イスラエルにつながり、神に受け入れられる正しいもの、罪なき者とされることを指し示す祈り、それが「**私たちの罪をお赦してください。私たちも私たちに負い目のある者をみな赦します**」という祈りなのです。

5. 試みにあわせない

最後にこの「**試み**」ナーサー(נָצֻר)は本来、アブラハムに与えられた試練を指す言葉であり、かつてはモリヤの山と呼ばれたエルサレムにおける苦しみを指す言葉です。

創世記【新改訳 2017】

22:1 これらの出来事後、神がアブラハムを**試練**にあわせられた。神が彼に「アブラハムよ」と呼びかけられると、彼は「はい、ここにおります」と答えた。

22:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたが愛しているひとり子イサクを連れて、**モリヤの地**に行きなさい。そして、わたしがあなたに告げる**一つの山の上**で、彼を全焼のささげ物として献げなさい。」

この出来事、「**試練**」の結末についてヘブル人への手紙はこう解説して記しています。

ヘブル人への手紙【新改訳 2017】

11:18 神はアブラハムに「イサクにあって、あなたの子孫が起こされる」と言われましたが、

11:19 彼は、神には人を死者の中からよみがえらせることもできると考えました。それで彼は、**比喩的に言えば、イサクを死者の中から取り戻した**のです。

やがて終わりの日、獣と呼ばれる反キリストによってエルサレムの神殿は奪われ、イスラエルの民は悲痛な苦しみの時、大患難時代を通ります。しかし地上再臨されるイエシュアによって獣は角を藪に引っ掛けた雄羊のように捉えられ、「**イサクを死者の中から取り戻した**」ように、エルサレムとその民はイエシュアの御手に取り戻され、回復されます。このような「**試み**」の時は、イスラエルとその家エルサレムのためであり、私たち教会がこれを受ける必要がありません。つまり、教会が大患難を通らないという神のご計画を指し示す祈り、それが「**私たちを試みにあわせないでください**」という祈りの意味なのです。そしてそれは私たち教会がこの大患難の前に地上から天に引き上げられるイエシュアの空中再臨、携挙の事実結びつきます（Iテサロニケ 4:16~17）。

このように「**主の祈り**」と呼ばれるこの祈りの中にも、「**神の国**」の完成へといたる神のご計画が秘められているのです。この奥義を理解した上で、これからもイエシュアが教えられた祈りとしてこの祈りを祈ることをぜひお勧めします。